II 中世・近世の芦屋

平安時代になって都と太宰府を結ぶ山陽道が整うと、葦屋駅が置かれるなど交通の要所となりました。

また『伊勢物語』によると、在原業平は芦屋に住み、京の都から来遊した貴人を布引の滝などへ案内したとあります。

鎌倉幕府が成立して武士の時代になると、芦屋周辺の地にも荘園が見られるようになります。そして、鎌倉幕府滅亡後は楠木正成と足利尊氏の打出合戦にはじまり、室町時代の足利尊氏と直義の打出浜合戦、鷹尾城合戦など、芦屋は戦いの舞台となりました。

しかし、農民たちはこうした戦乱のなかで結束を強めていったのです。そして、生活の集合体としての郷村が確立されていきました。この結果、戦国時代の末には打出、芦屋、三条、津知という四つの村が誕生したのです。

この戦国の世を統一したのが豊臣秀吉。芦屋はその直轄地となりますが、その後、天下が徳川家康の手に渡るとともに徳川家領となり、のちには尼崎藩の支配下に入ったのでした。

これ以後、領地替えによって藩主が二度変わりましたが、農業技術の進歩や新田の開発、さらに水車を用いた菜種の油搾り業や精米業が発達し、人びとの生活はしだいに安定していきました。

明和6年(1769)になると芦屋と打出は再び天領となり、三条と津知はひきつづき尼崎藩領のまま明治維新を迎えることになります。

鷹尾城(城山)

業平別荘図　(福田眉仙画、芦屋神社所蔵)

芦屋川水車絵図　安政4年 (1857)